石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第493号　令和6年11月1日発行

特別展「食を彩る工芸」

《龍田川蒔絵提重》　江戸時代（17世紀頃）　個人蔵
（撮影　濱崎敏彦）
－特別展「食を彩る工芸」より－

加賀藩の美術工芸【前田育徳会尊經閣文庫分館】

石川県の寺宝【古美術】

彫刻家たちの研鑽【近現代彫刻】

優品選【近現代絵画】

優品選【近現代工芸】

- 展覧会回顧　特別展「能登が育んだ作家たち」
- 11月の行事予定
- 学芸室こぼれ話
- アラカルト ただいま展示中

企画展（第7・8・9展示室）

特別展「食を彩る工芸」

主催／石川県立美術館　共催／北國新聞社
後援／NHK金沢放送局、MRO北陸放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送、石川テレビ放送

11月9日（土）～12月8日（日）　会期中無休 ※初日は開会式後（午前10時頃）の入場となります

錦秋のいしかわ、美食の金沢。

海、山の豊饒な自然が生み出す数多の食材を、料理人が繊細、優美な料理に仕立て、名工の手による素晴らしい器に盛られ、供される。当地では、舌で味わい、目で楽しむ、上質な食文化が発達しました。また、座敷や庭といった設えや、心こもったもてなしが、食文化をさらに味わい深いものにしました。

本展は、その中でも、金沢・石川の食文化を彩りあるものにしている工芸品に着目し、それがさまざまな食のシーンでどのように用いられてきたかをご紹介します。

第1部では、ハレの日に用いられた食器や四季を楽しむ器、お茶席や茶屋での設えに用いられる道具など、積年の伝統が作り上げてきた工芸品をさまざまなテーマで展示します。

当地では、美術館のみならず、伝統ある料亭や料理旅館にも素晴らしい工芸品が数多く所蔵され、また、実際に使われてきました。本展では、これまでにない試みとして、そうした食のおもてなしの名だたる名店の優品を中心に展示し、この地における文化の広がりと厚みをご紹介します。

第2部では、工芸王国いしかわの次代を担う気鋭の工芸作家が、この展覧会のため1年の歳月をかけ制作した、食を彩る新作の共演をお楽しみいただきます。

総合芸術ともいうべき「食文化」、それに欠くことのできない器などの工芸作品の奥深い魅力をご堪能いただければ幸いです。

観覧料

一般1，000円（800円）
大学生800円（600円）
高校生以下無料
＊2階コレクション展観覧料を含む
＊（　）内は65歳以上の方および団体料金（20名以上）
＊身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

関連行事

加賀屋女将と青柳館長（石川県立美術館）のスペシャル対談をはじめ、出品作家によるギャラリートーク、当館学芸員による土曜講座、参加型テーブルコーディネート企画など、楽しいイベントが満載です。詳細は本誌7頁行事欄、当館公式ウェブサイトでご確認ください。

《蒔絵じぶ椀　東海道五十三次より「三島」》
あらや滔々庵蔵（撮影　濱崎敏彦）

角偉三郎《曲家五段重 片身塗》 加賀屋蔵
（撮影　濱崎敏彦）

北大路魯山人《織部俎板盤》 京都国立近代美術館蔵

前田育徳会尊経閣文庫分館

加賀藩の美術工芸

11月9日(土)～12月8日(日)　会期中無休

学芸員の眼

本展は「食」という視点から工芸作品を紹介していますので、器だけでなく重箱などの「弁当」も展示しています。弁当は主に花見や月見など行楽の場で使われていて、庶民の日常の様々な場面を描いた風俗図などにも描かれています。「弁当」とは、もともと「予め用意したものを割り当てる」の意味で、容器の中に詰められた料理を指す言葉でしたが、桃山時代の頃からその容器を弁当と呼ぶようになり、江戸時代に入るとより一般的な用語として定着した、と考えられています。また、「重箱」は、室町時代の書院のしつらえに欠かすことのできなかった「食籠（じきろう）」が転用されたものとされています。その食籠をより持ち運びがしやすいように、提手を付けたものが「提重（さげじゅう）」へと変化したという説があります。

例えば、本展に出品する《紅葉蒔絵提重》は、2箱で1対の大きな提重で、枠箱、重箱や箱の中に収められている膳や椀すべてに豪華な紅葉の蒔絵が施されています。野外で即席の酒宴を開くために必要な器や酒器が組み込まれたものを「遊山弁当」と呼びますが、本作は提重の中に5人分の組膳や湯桶、重箱、食器が収まっています。重箱の中にある好きな食べ物を取り分けて食べるというよりも、準備された料理を椀に盛りつけて膳に載せて提供する、というような使い方をされたと考えられています。持ち運び用の会席膳と呼べるような豪華な提重です。

《紅葉蒔絵提重》個人蔵（撮影　濱崎敏彦）

「加賀藩の美術工芸」では、前田育徳会が所蔵する絵画や工芸作品を紹介します。

絵画作品では、徳川将軍家とのつながりを示す歴代将軍の自筆画を中心に展示します。将軍自筆の書や絵画は、家臣や朝廷などとのつながりを深めるために、下賜もしくは贈呈されました。これら歴代将軍自筆画は、近年「ゆるい」「かわいい」などと評され注目を集めています。今回は、3代将軍・家光、4代将軍・家綱、12代将軍・家慶の作品を紹介します。素朴ともいえる将軍自筆の書画からは、将軍の人柄や日常の暮らしぶりが感じられることでしょう。

工芸作品では、調度や香道具など漆芸作品を中心に紹介します。特に2代五十嵐道甫の作と伝わる《黒塗布目引出絵替絵具箪笥》、清水九兵衛作《真鳥羽入箪笥》と《老松蒔絵硯箱》は必見です。加賀藩には2代藩主・利長の時代より「御細工所」という武器や武具を修理する組織がありました。3代藩主・利常の時代になると、調度品などの製作や修理を行う組織に転向していきました。五十嵐道甫は京都、清水九兵衛は江戸から、この「御細工所」に指導者として招かれたのです。彼らはここで蒔絵の指導をするとともに、前田家の調度類を作製しました。まさに加賀における工芸技術の礎を築いたといえるでしょう。

本展では、このほか白隠作の《観音羅漢像》や《古九谷色絵中皿》などの名品もあわせて展示します。前田育徳会に伝わる美術工芸作品の数々を、この機会にぜひご覧ください。

伝2代五十嵐道甫《黒塗布目引出絵替絵具箪笥》

古美術（第2展示室）

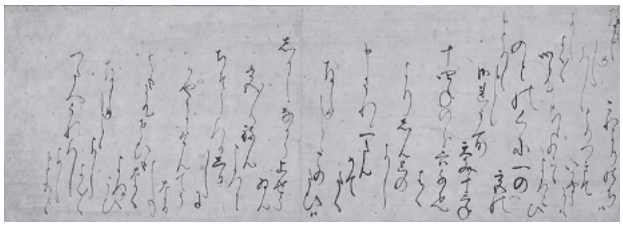
石川県の寺宝

11月9日（土）～12月8日（日）　会期中無休

今夏の特別展「まるごと奈良博」では、奈良国立博物館が所蔵する国宝・重要文化財を多数含む仏教美術の名品を展示いたしました。5万人を超えるお客様にお越しいただき、講演会やイベントも大変な盛況であったことから、仏像・仏画をはじめとする仏教美術への関心の高さを改めて実感しました。

今回の「石川の寺宝」では、石川県内の寺院（一部作品は神社）が所蔵する仏画をはじめとした寺宝をご紹介いたします。なかには「両界曼荼羅」や「涅槃図」など、特別展「まるごと奈良博」にも出展していたおなじみのテーマの作品も展示します。同一の主題であっても、両者に描かれていた人物や風景、姿勢や色彩などの違いに注目すると、より深く楽しんでいただけるかと思います。

また今回は、元旦の地震、9月の豪雨と被害にあわれた能登へ復興の気持ちを込めまして、能登にある神社仏閣より当館がお預かりしている作品を一挙に展示いたします。そのなかには気多大社所蔵の重要文化財《後奈良天皇女房奉書》をはじめ、輪島市の金蔵寺所蔵の石川県指定文化財《両界曼荼羅図》、總持寺祖院所蔵の石川県指定文化財《十六羅漢図》など、石川を代表する文化財も含まれており、能登における文化の厚みを感じていただけるのではないでしょうか。作品や文化をつうじて、能登に思いをはせていただけますと幸いです。



重要文化財《後奈良天皇女房奉書》気多大社蔵

学芸員の眼

「涅槃」はインド以来、中国や朝鮮でも多くの作例が残り、日本でもよく表されるテーマの一つです。今回は金沢市指定文化財《仏涅槃図》（金沢市・高巌寺蔵）を展示しています。

実際の作品を見てみましょう。画面中央に横たわる金色の釈迦に目が行きがちですが、ぜひその周辺にもご注目を。画面上部には、釈迦の母親である摩耶夫人（まやぶにん）が天から雲にのって、いままさに駆け付けんばかり。釈迦のまわりを見てみると、顔を覆い涙する者、地面に伏せり泣きわめく者、悲しみのあまり腰を抜かす者…と、弟子たちの悲嘆のありさまがありありと伝わってくるかのようです。

まさにこの瞬間を描いたようなドラマチックさを、作品を直に見て味わってください。

金沢市指定文化財《仏涅槃図》高巌寺蔵

近現代絵画（第3・6展示室）

優品選

11月9日（土）～12月8日（日）　会期中無休

今回展示する日本画・下村正一の《秋》は、10月の展示から引き続きご覧いただく作品です。本作は京都市立美術工芸学校絵画科の卒業制作で、作者18歳のころの若描きです。ややデフォルメされた2頭の狐が野を駆ける姿は、近代日本画の持つ牧歌的な味わいと、画塾「東丘社」を舞台に作者がこの先果敢に挑むことになる、構成的で抽象的な画面づくりを予感させる秀作です。

油彩画分野では、宮本三郎の《歌手》にご注目ください。真っ赤なドレスを身にまとい、熱唱する女性歌手の姿を原色の絵具を厚く塗り重ねて描いています。昭和30年代半ばから40年頃にかけてみられる対象物を強く主張する質感により、歌手の高揚のみならず作画に対する画家の自信さえもが伝わってくるようです。

彫刻分野からは吉田三郎《パリーの女》をご紹介します。男性像や動物彫刻を多く制作した吉田ですが、女性像も制作しています。吉田は昭和6年に古代彫刻研究のためにフランスやイタリアへ外遊しました。本作は、当時パリで出会った女性をモデルにしたものでしょう。小品ながら、端麗な女性の姿を確かに捉えています。

素描・版画作品では、芸術や野菜や果物の実る秋、また、風景など秋をテーマに作品を展示いたします。草間彌生にとって愛するモチーフであったかぼちゃ。草間は立体、平面を問わず網目や水玉を多用したかぼちゃの作品を手掛けています。今回はシルクスクリーンで制作された版画作品をお楽しみください。

下村正一《秋》

近現代彫刻（第4展示室）

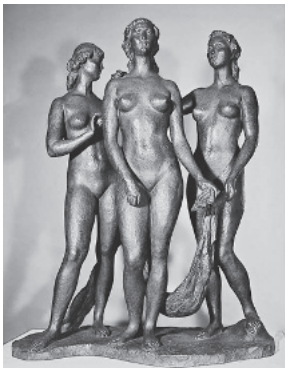
彫刻家たちの研鑽

11月9日（土）～12月8日（日）　会期中無休

芸術家たちの創作、表現への模索と探求は、彼らにとって欠かすことのできない営みです。それは、一徹に自身の理想とする美を求めたり、あるいは長い制作活動の中で新たな美を見出し、そのすがたを探究したりするなど、作家の歩む創作の道のりによってさまざまです。

本特集展示では、木村珪二、畝村直久、堀義雄、石田康夫の4人の彫刻家たちの作品から、彫刻家たちが求めた美のすがたと研鑽の道をたどります。皆、人体を主なモチーフとする作家ですが、目指した表現はそれぞれ異なります。写実的で健康的な男性像を多く作った木村珪二、柔軟性を持った優美な女性像を制作した畝村直久、人体の中でも性器をモチーフに取り上げた堀義雄、そしてシンプルながら量感や生命感に満ちた裸婦像に取り組んだ石田康夫。4人の作家たちの作品から彫刻家たちの研鑽と彼らが求め、それによって生まれた美のすがたをお楽しみください。

木村珪二《鰯雲》



畝村直久《和》

展覧会回顧

〈能登半島地震復興応援プロジェクト“甦れ能登”〉

特別展「能登が育んだ作家たち」

6月1日（土）～6月23日（日）　会期中無休

本展は、本年元日の能登半島地震による被災に沈んだ能登を、新たな形で再興するための応援プロジェクトとして企画しました。能登に生まれ、今も能登を活躍の舞台としている作家。現在は生地を離れて新しい土地で制作に励む作家。能登に魅せられ、能登を題材として表現する作家など、能登とのかかわりを感じさせる作家の優品（絵画・彫塑・工芸約70点）を展示しました。準備期間が少なく館蔵品が中心となりましたが、石川県をあげて能登を応援する展覧会にしたいとの思いから、比較的被害の少なかった金沢市以南の美術館・博物館にご協力をお願いし、また数多く県内作家の作品を所蔵されている北國新聞社からも出品していただいて、能登の芸術の魅力を発信できたのではないかと思います。

ご来館いただいた方々からは、「能登に数多くの芸術家がいることを知った」「震災で失われた風景も多く、このような美術作品として残し後世に伝えていく大切さを思った」「タイムリーな企画だった」「能登の復興を心より願っている」等の声を寄せていただきました。

また本展の観覧料は、全額を能登の美術文化の再興のために活用することとし、能登に想いを寄せ、趣旨にご賛同いただいた多くの方々に、あらためて感謝申し上げます。これからも引き続き能登の芸術文化の復興発展を応援してまいります。

近現代工芸（第5展示室）

優品選

11月9日（土）～12月8日（日）　会期中無休

近現代工芸・優品選では、秋の風景を感じる作品として前会期より展示している大場松魚《平文薄の棚》など、引き続きの作品を含め優品選と題し特集します。

そのなかでも今回は、羽田登喜男《友禅訪問着「群鴉惜春」》と《友禅訪問着「群鴉錦秋」》が並んで展示となります。《友禅訪問着「群鴉惜春」》は桜の花が舞い散る下で鴛鴦（おしどり）が仲睦まじくのんびりと泳いでいる様を表現しています。春をイメージした草木の萌える緑の濃淡を蒔蝋の技法で染めた地色の中に色鮮やかな鴛鴦を染めています。白と緑色に染められた桜の花びらは、水面に浮かんだ花びらが影を落としているように見え、一段と奥行きを感じさせます。春の柔らかな陽差しが水面に揺れて、春のぬくもりや春の風までをきかせてくれています。また、対照的に《友禅訪問着「群鴉錦秋」》は紅葉が散る下で鴛鴦が群れになりとどまっている様を表現しています。落ちる紅葉の葉は紅色ではなく、秋から冬をイメージする、静かな空気を感じられる白と青色で染めています。春秋の二点を見比べていると時間のたつのを忘れてしまうかもしれません。

このほか上野為二《友禅赤茶地鶏落葉文訪問着「暁声」》。織の地紋を生かした深みのある赤茶地に金茶色の線描で写実的に鶏を染めています。色数を抑え、上品な仕上がりを感じさせる作品です。このほか優品の数々をたっぷりとお楽しみください。

上野為二《友禅赤茶地鶏落葉文訪問着「暁声」》

11月の行事予定

※＝特別展「食を彩る工芸」関連行事

■加賀屋女将×青柳館長　スペシャル対談 ※

日時　11月9日（土）13:30～15:00
会場　石川県立美術館ホール
出演　長谷川明子氏（加賀屋女将）、青柳正規（当館館長）
聴講無料、申込不要

■出品作家によるギャラリートーク ※

本展第2部の出品作家が、作品を前に器の魅力を語ります。

出演　11月10日（日）　中田博士氏（陶芸）、見附正康氏（陶芸）、中嶋武仁氏（木工）
　　11月17日（日）　多田幸史氏（陶芸）、宮本雅夫氏（陶芸）、坂井直樹氏（金工）
　　11月24日（日）　田中義光氏（漆芸）、水口咲氏（漆芸）
時間　14:00～15:00
会場　石川県立美術館企画展示室
要観覧券、申込不要

■土曜講座「金沢の近代数寄者と名品の流れ」※

日時　11月16日（土）　13:30～15:00
担当　寺川和子（学芸第二課長）
会場　石川県立美術館講義室
聴講無料、申込不要

■土曜講座「石川の食文化と工芸」※

日時　11月30日（土）　13:30～15:00
担当　奈良竜一（学芸主任）
会場　石川県立美術館講義室
聴講無料、申込不要

■石川県立図書館との連携事業
トークイベント「食を彩る工芸、その魅力」※

日時　11月23日（土・祝）　13:30～15:00
聴講無料、要申込（先着順）
会場　石川県立図書館　だんだん広場
※講師・申込方法は決まり次第石川県立図書館公式ウェブサイトにてお知らせします。

学芸室こぼれ話

村上　尚子（学芸第一課学芸専門員）
「来年の展覧会の準備をしています」

次年度の展覧会の準備のひとつとして、故嶋崎丞前館長が執筆した約50年前の論文に注釈をつける作業をしています。どのような文献を調べたのか、原本をあたるのですが、該当箇所に付箋があったり、うすく鉛筆で線が引かれていたりすると、「あ、見つけた！」とばかりに、宝探しをしているようで楽しくもあります。かつて同じようにこの箇所を読んでいた前館長に、少しは近づけているのでしょうか。

いつの時代であっても、石川県立美術館が取り組むべき研究テーマがあります。「石川県立美術館だからこそできる展示を」学芸員の先達が取り組んだ展覧会への思い。その熱意を、確実に後輩たちへつなげることが、今の自身の役目と考えています。

昭和50年開催の展覧会図録

中澤　菜見子（学芸第二課学芸主任）
「展覧会で再会」

昨年開催した「三の丸尚蔵館収蔵品展」と、今夏開催した「まるごと奈良博展」は、私の美術館経験の中でも指折りに規模の大きい展覧会でした。展覧会の規模の大小で、仕事に対する姿勢が変わるというわけではありませんが、やはり何かと気を遣うものです。

実は「まるごと奈良博展」では、先方の研究員として、大学の研究室の先輩がいらっしゃり、いっしょに仕事をさせていただきました。心安くもあり、人一倍背筋が伸びるようでもあり、いずれにせよ楽しい時間でした。仕事を続けていくなかで、このようなうれしい再会や出会いがまたあればなと思っています。

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.81

《水文蒔絵漆椀》みずもんまきえうるしわん

口径11.5　底径6.2　高さ8.2（cm）
昭和49年（1974）　第21回日本伝統工芸展

松田権六　まつだごんろく

明治29年（1896）～昭和61年（1986）

本作は、木の保湿性を生かすために材として木曾檜を用いて、古い時代の桴漆方法に倣って作られました。椀には布着せをせずに、木地に直接日本産の漆を13回も固め塗り重ねて仕上げています。高さのある高台に描かれた流水文は、研出蒔絵によるもので、抑えられた輝きが上品でありながらも、蒔絵と端正な椀の造形が見事に調和しているので、気品漂う椀となっています。高台内に朱漆で「権六作」の銘があります。

作者である松田権六は、「漆の神様」と呼ばれ、芸術院会員で重要無形文化財「蒔絵」保持者です。権六は1日1枚スケッチを描いていて、その図案を自身の制作に生かしてきました。権六の図案をまとめた『松田権六　図案日誌』（綜合工房、昭和52年（1977）刊）には、「流れ」と題して、水流や風や波など様々な流れのスケッチが描き貯められています。本作もこのような成果による、高い技術の蒔絵であるといえるでしょう。

松田権六は金沢市生まれ、石川県立工業学校漆工科描金部を卒業後、東京美術学校漆工科在学中より六角紫水に師事。昭和2年（1927）第8回帝展初入選以後、新文展、日展、日本伝統工芸展で活躍します。22年（1947）芸術院会員。30年（1955）重要無形文化財「蒔絵」保持者に認定されます。日本工芸会創立に参加。51年文化勲章受章。日本や中国の古典漆芸作品を研究し、それらを発展させた格調高い作風を築きました。

本作は11月9日（土）から12月8日（日）に開催される特別展「食を彩る工芸」にて展示いたします。ぜひご覧ください。

次回の展覧会

令和6年12月14（土）
～令和7年2月3日（月）
※12月29日～1月3日（年末年始）は休館

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第2展示室
前田家と能	石川県立美術館の能面コレクション

第3・4展示室	第6展示室	第5展示室
優品選【近現代絵画・彫刻】	かな・方寸の美【書】	よろこびのかたち【工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金
11月4日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00

11月の休館日は
5日（火）～8日（金）

石川県立美術館だより
第493号（毎月発行）
2024年11月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076（231）7580
Fax:076（224）9550
URL https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。